多可島考

福岡縣囑託　川上市太郎

(一)緒言

文永十一年（紀元一九三四）秋、第一回日本遠征失敗の恨み、骨髓に徹したる元主忽必烈、更に必勝を期したる第二回日本遠征總動員を企畫し、弘安四年（紀一九四一）夏、彼蒙古軍は東路軍、江南軍の二手となり、一擧神州を蹂躙せんと、東路軍兵四萬二千、船艦九百艘は朝鮮經由、江南軍兵十萬、船三千五百艘は楊子江口出帆、支那海横斷、六月中旬壹岐島にて兩軍合併、博多灣より太宰府を衝かんの一般方略である。

然るに東路軍の壹岐到着、豫定より早かりしため彼は江南兵の來着前に、博多灣の偵察戰を試み、運よくば後續部隊の上陸基地を獲得せんものと、六月上旬、堂々博多灣頭に臨めば、沿岸之れ日本軍の防壘堅陣に作戰利なく、志賀、野古島間に碇泊、防壘なき海の中道に上陸、此處より進軍を試みしに忽ち奈多濱より迂回急進せる日本軍と西戸崎附近にて交戰數度、互に勝

敗あり遂に目的を達せず、母船に退き浪に漂ひ、多可（玄界）島附近にあつたが、軈て六月中旬、視界より遁走した、それが江南軍の來着をまつため壹岐に退いたと知れた。

神人許さゞる此の外敵を、いかで其のまゝ打ちやるべき、我亦之を壹岐に追擊數回、彼が心膽を寒からしめた。

此邊にて遠征斷念早々歸蒙すべき運命の潮合ひ知らざる傲慢飽なき蠻賊共、其の江南軍の平戸島に來着するや、互に連絡して、七月末、愈々太宰府攻擊の作戰に出で、東路軍先づ博多灣に迫り、江南軍亦根據地平戸を進發、海を掩うたる蒙古軍兵十四萬二千、船艦四千四百艘。

神國日本に對し、傍若無人の其の行動。

我は國防第一線を承はる九州男子、武士の面目、一對一百、死鬪を決せし士氣充滿、博多灣沿岸攻勢防禦の陣營に軍旗翻飜たり。

七月二十七日、敵艦見ゆ、我が先陣忽ち多可（玄界）島に邀へ海上戰徹宵彼を苦しめた。

本陣自重、祖國興亡の分岐、目釘を霑し、滿を持し動せざること巖の如き日本魂、來たれ、敵の本隊、滂私奉公、一觸卽發、殺氣低溢、實にや、暴風の前の靜謐。

時しもや、

嗚呼、神慮、長し、

潤七月朔日、（元ノ八月朔）

天日、蝕りて颶風猛烈、地物、海物、悉く席捲し、狂瀾怒濤は連鎖を切り艨艟を顚覆、翻弄し盡し、東路軍を玄海灘多可島附近、江南軍は平戸血崎鷹島沖の底の藻屑と成し果てた。

二

嗚呼。

而して大正十四年（紀元二五八五）關東省金州城外から當時東路軍に從軍したる百戸張成の墓碑石發見せられ、其の碑文に

（前略）

以六月六日、至倭之志賀島夜將半、賊兵□□來襲、君與所部據艦戰、至曉賊舟遁返、八日賊遊陸復來、君率纏弓弩、先登岸迎敵奪占其□要、賊弗能前、日晡、賊軍復集、又返敗之、明日倭大會兵來戰、君統所部入陣奮戰、賊不能支、殺傷過、賊敗去。

行中書賜賞有差、賜君幣帛二、軍還至一岐島、六月晦七月二日、賊兵兩至、皆戰敗之、獲器仗無算、二十七日移軍至打可島、賊舟復集、君整艦、與所部、日以繼夜鏖戰至明、賊舟始退、八月朔、海風作、船壞、軍還至京。（下略）

の辭句があつて以來、其の資料の重要性が認められ、東路軍博多灣口「多可島」附近にて覆滅の確實を明にし、從つて吾人傳承の史蹟認識に一層の信頼を來たした次第である。

凡そ史料重要なればなる程、其の研究に最も愼重熟考を要すべきものである。

然るに此の碑文につき深き攻究も費やさず、碑文の「打可島」を直ちに肥前の「鷹島」と速斷し、更に元史にある「竹島」まで「鷹島」と混同し、蒙古全軍、平戸鷹島沖にて覆滅したりとなし、恬として顧みざるの輩あるに至つては、惜ら貴重史料の究明を怠り、正鵠を失し、考査の此のまゝ放棄せらるゝを慮り、こゝに「多可島考」をなす所以である。

三

(二) 竹島は鷹島でない

先づ元史にある「竹島」から探らねばならぬ。

元史李庭傳　至元十七年拜二驃騎衛上將軍中書左丞一東征二日本一、十八年軍次二竹島一遇レ風船盡壞、

元史相威傳　至元十八年左丞范文虎參政李庭次二兵十萬一航海征レ倭七盡夜、至二竹島一、

癸辛雜識續集　至元十八年、大軍征二日本一、船軍已至二竹島一、與二其太宰府一甚邇、

皆「竹島」とあるが、此の讀み方に最も注意を要する、之を簡單に日本讀みに「タケ島」と讀めば「鷹島」と語呂が似たものとなり、直ぐ樣、竹島は鷹島と思つたのが抑も粗忽の生じた第一歩で、多くの人が惑されてゐる、元史作者は支那人だから先づ一通り支那音を考へて見るの要がある。

然らば「竹島」は何う讀むべきかと云へば、

之は

竹島 Chu Tao 又ハ Chih hô ヲツメテ Chu トナル)

と讀まねばならぬ。

(註)〔右側は日本の音 左側は支那音〕　括弧内は發音過程を示すため羅馬綴字を藉る)

歴史を讀む者は先づ現地と地圖を讀まねばならぬ。

今肥前の地圖に就てい、平戸の西群島に「ちか島」がある、此の「値賀島」を元史が訛つて「竹島」と書いたものである。

而して此の「値賀島」の名は古くから我が國史に歴然としてゐる。

(1) 肥前國風土記

昔者、同じ天皇（景行天皇）巡幸し給ひし時、志式島の行宮に在して西の海を御覽し給ひしに海中に島あり、煙氣多に覆へりき、勅して陪從の阿曇連百足を遣りて察しめ給ひしに島八十餘あり、就中の二つの島は、島別に人あり、第一の島の名は小近にし、土蜘蛛大耳居み、第二の島の名は大近にして、土蜘蛛垂耳居み、自餘の島は、並人在らざりき、（中略）こゝに天皇、恩を垂りて赦放し給ひき、更に勅り給ひしく、「この島は遠けども猶見るに近きが如し、近の島といふべし」と宣り給ひき、因りて値嘉の島といふ。（中略）或るは一百餘の近の島あり、或るは八十餘の近の島あり、西に船を泊つ停二處あり、（一處の名は相子の停といひ、二十餘の船を泊つべし、一處の名は川原の浦といひ一十餘の船を泊つべし）遣唐の使この停より發して、美禰良久の濟（すなはち川原の浦の西の濟なり）に到り此より發航して、西を指して度る。

とあるやうに、遣唐使の昔から其の名が知れ渡つたものである。

(2) 三代實錄卷二十八

貞觀十八年三月九日、庇羅、値嘉兩鄕を上近、下近の二部とし、値嘉島と總稱す。

此の頃は遣唐使の往復瀬繁の時である。

(3) 和名抄

肥前國松浦郡の鄕名に、庇羅（平戸ノコト）、値嘉（値賀）あり、

斯く上代から「チカ島」と呼んでをり、そして中支から支那海を横斷して、日本の博多津（今津は遣唐使の寄港地）に來た者は、此の「値賀島」を第一目標とし、此處から東の平戸港を經て、今津、博多への航路をとつたものであることは必然過ぎる水路案內である。それ程「値賀島」は當時日支航路者仲間では平戸と共に知られて居つたものである。

で更に讀み方を研究すれば

Chih hê（ho ニ近シ）Tao　値賀島　Chih hê ガツマリテ Chu Tao　竹島

となる、而して鷹島は

Ying Tao　鷹島

であつて、

之は耳からも、眼からも混同せらるべきものでない。

で、元史の「竹島 Chu Tao」は「鷹島 Ying Tao」でなく、「値賀島 Chih hê Tao」であると判斷してよいものと思はるゝ。

即ち江南軍は揚子江附近より支那海を横斷して「値賀島」を第一目標としたものと推測せらるゝのである。（附地圖 東路江南軍航路推測圖參照ノコト）

（三）平湖＝平壺＝平戸

次ぎに平湖、平壺、平戸に移る、元史にある。

(1) 元史、張禧傳　與二右丞范文虎、左丞李庭一同率二舟師一泛レ海東征至二日本一禧卽捨レ舟築二壘平湖島一約二束戰艦一各相去五十步止泊以避二風濤擊一

(2) 元史、范文虎傳　至元十八年七月軍至二平壺島一遇二颶風壞レ舟

(3) 元史、外夷傳　至元十八年五月然後入征二日本一又爲二風水不一レ便再議定會二於一岐島一今年三月有下日本船爲二風水一漂至者上令二レ其水工畫二地圖一因見近二太宰府一西有二平戸島者一周圍皆水可レ屯二軍艦一。

之等文中の平湖、平壺、平戸を見れば

平湖 Ping Hu　平壺 Ping Hu　平戸 Ping Hu

三者共に發音皆相似てゐる、但し平仄が違つてゐる、湖と壺とは下平聲、戸は去聲である、之は「平戸」を耳で聞いたのでなく、例へば前述の外夷傳にある如く、漂流者が示した文字を見て「ピンフー Ping Hu」と記臆したのが、後になつて「戸」の字の代りに同音の「湖」を充てたり「壺」の字を充てたりしたものと思はるゝ。

平湖、平壺何れも平戸を指したものである、而して「平戸」は江南軍の作戰基地である。

(四) 元史上に鷹島の有無

此處で一考を拂はねばならないのは、「鷹島」なるものゝ、元史上に有るか無いかである、そして何れの元史にも「鷹島」なる辭句は無い。

抑も「鷹島」は江南軍の第一次（本國にて）の作戰計畫に何等の必要もなく、江南軍は揚子江口より支那海を横斷し、値賀島に寄港、更に平戸港に移り、此處を基地として壹岐の東路軍と連絡を取り、第二次作戰計畫たる太宰府總攻擊の戰略を決定し七月末大艦隊が逐次出帆した際迄は、尙「鷹島」は雲煙過眼のものであつた、のに、偶然にも突然的の颶風に遭遇したのである。

激浪に翻弄浮沈する船艦將卒の最も多くが打ち上げられたのが鷹島、千崎沖である。

此處で日本軍の掃蕩戰の演ぜられない前に良艦を擇び或は破船を急修理し逃げ出した者や、或は颶風の吹き廻しで朝鮮方向に流された幸運者は一命を助かつて歸國したが、暴風の中で島の名、地名など聞く隙も、尋ぬる氣もなく、唯無我夢中であつたので、後日の元史の史料に之を知る由もなく、根據地の平戸島附近の遭難と書いてゐる。

至二平壺島一遇二颶風一壞レ舟

遭難記事としては。別に之で差支はない、

誰しも敗戰は喜ばざるもの況んや其の記事の公開は尙更嫌がるもの、元史の遭難記述の省簡なる亦宜なりであらう。

或は「五龍山下」に棄てらると書いたものもあるが、此の五龍山に就いては尙考究の餘地があるから次ぎに述べるが、

今假りに五龍山は鷹島と形容したものとすれば、夫れは鷹島を外海から眺めても之が獨立したる島とは見えず、肥前本土の一部と見ゆるもので、從つて其の島形を五龍山と形容したのかも知れない、が之は至當とも思はれないものである。

以上の樣に鷹島は江南軍の作戰計畫に要なく、元史にも記憶せられなかつたものである。

平戸には長期間滯陣したが、鷹島は突發的の遭難地で、元兵の上陸したるは捕虜となり處分せられて記憶すべき者は有らず、漂船にて運よく歸國したるは恐怖に怯びえて島形を覺えたる者無き情況で、自然、夢の樣に消えたものであらう。

（五）五龍山と「ムクリ岳」

○五　龍　山

元史に五龍山下に難船するとあるが、この五龍山も亦鷹島であると云ふものあるが、肯定は出來ない。

五龍山は博多灣口の玄海島であるとの說をなした先覺者もある。

五龍山（ウーロンシヤヌ）（Wu Lung Shan）

で此の「ウーロン」に似た島名は、筑前玄海の中にある「オロ島」である、博多灣口より西北に離れて、緯度は壹岐の東に當る、洋中の小島である、島の中央に鷹岳があり、神社、堀池、民家もある。

夫れ江南軍三千五百隻が太宰府攻擊のため平戸の根據地出帆、博多灣に進むとせば、其の隊形の延長、蓋し長大なるものである（次章に「蒙古軍船に就いて」に說く）。

從つて先發の一部が博多灣口に達したるとも、本隊は尙根據地を離れざる狀態と思はる。若し此の時に、颱風、襲來せんか。一部は筑前玄海上に、大部分は肥前海上に覆沒の慘に遭遇するのであらう。

從つて、五龍山を、玄海島としても、また玄海洋中の「オロ島」としても宛かも風下に當り

狀況に不自然はないのである。

○ムクリ岳

博多灣口を扼する東が志賀島で、西が北崎半島である、其の北崎半島の先端にある山が「ムクリ岳」で、一名「蒙古山」とも云ふ。相傳へて、蒙古軍侵入占領したもの。之に登るには其の西麓の西ノ浦に船を繫けば實に易々として、博多方面、今津方面には全く隱蔽して登らるゝ。西戸崎の砂濱は繪を見る樣に、唐津の海は指呼のうちで、陸海兩用の要點である。

然るに我が防備の兵力此の邊鄙まで及ばず、放任したもので、敵が占據しても別に痛痒を感ぜないものであつたらう。

果然、東路軍の再襲、七月二十七八日、多可島海上戰（後章に詳述）後、敵は眼前のムクリ岳を、何んで見捨てよう。彼は西浦より易々と占據したのを、逃げ隱れに見てゐた住民が僅かに語り傳へたものである。

此のムクリ岳占據を古記錄がないため、傳へを無視して顧みざる如きは、上陸作戰を語る者の更に一考を要するものであらう。

此の「ムクリ」の語因に就いて、大阪外國語學校蒙古語教師福隆阿先生より聞けば

「ムクリ山」は元來蒙古語にて「まゝ」「モンゴル」と云ひ、支那では之に「蒙古」の字を當てまして「モング」と云つてゐます、この「モンゴル」が當時の蒙古軍の兵士より傳へられまして、それが訛つて「ムクリ」となつたと存じます。（昭和十四年二月二十三日）

ムクリ岳占據も僅か三日、颱風來つて船も人も悉く玄海の藻屑と化したのである。

戰場、朝露繁し、

× × ×

仙厓和尚は詩にして

憶昔胡元寇九州　憶フ昔胡元九州ヲ寇ス
樓船十萬欲加憂　樓船十萬憂ヲ加ヘント欲ス
神風那識東南起　神風何ンゾ識ラン東南ヨリ起ル
蒙古山高是髑髏　蒙古山高キ是レ髑髏

望蒙古山有感
扶桑最初禪窟厓艸

(六) 蒙古軍船に就いて

蒙古軍船の大さと其の航海隊形を考察することが、作戰の經過並に敵行動を察知するに必須の關係がある。

○文永役に蒙古軍の使用船艦は

軍船（千料舟）　三百隻
秡都魯輕疾舟　三百隻
汲水舟　三百隻

となつて居り、各軍船に輕疾舟一隻、汲水舟一艘宛を携行したる實に準備周到なるものである。

(1) 千料舟

其の軍船千料舟の大さを考究するに、千石を積載する船となつて居り、帆漕兩樣の構造の大型木造艦で、船體に大なる船艙あり、中央に大檣たち、船首に望櫓、碇綱操車、船尾に帆綱卷く操車及舵を有し、之に武具の弩弓、楯などの備付けあるものと推定せらる。

其の太さに就いては福岡水產試驗場岡村治人氏の推測では、十石を一屯と見做し、千石で百屯位のものであらう。

長さ凡そ九十尺、幅二十六尺、吃水九尺位ではあるまいか、

內務省博多港修築浚渫中、蒙古軍船碇石出土地の水深平均干潮面下十五尺位であれば、此

の吃水適當ならんか。

(2)輕疾舟、汲水舟

輕疾舟は長さ四間位二十五尺位、汲水舟は長さ二間半十五尺位のものであらう。

(3)船　列

之等の艦船が如何なる隊形をとつて航海したかと云ふことは、當時の航海術の程度と比較推考を要するもので甚だ複雜なるものである。

木船造船の權威たる市川大治郎氏に伺へば

(イ)遠洋航海には輕疾舟、汲水舟を皆本艦に搭載したものと思はる。

(ロ)全艦隊が堂々と縱列隊形などにての航行は當時到底不可能で、一群（一部隊）毎に出發地と到着地を指示して、任意之に出航したものと思はる。

(ハ)全艦隊が一群落となつて必要地點（戰場）に到着せんが爲めには最後の集合地は戰場との距離が近いことが必須條件であつたものと思はる。

右の要項から考ふれば、朝鮮出發、對馬、壹岐への航海は輕疾舟、汲水舟を本艦に搭載した

る卽ち本船三百隻の航海となる。

之が幾部隊かに分かれて航海したのであらうが、若し之を一列と見ても

船長十五間、距離三十間と見て、一里に四十八隻となり、三百隻にて六里となる。

之が數部隊に區分すれば更に長距離となり、必しも一日に出發、到着とは定まらないものであつたらう。

更に此の艦隊が對馬、壹岐を侵掠して、松浦潟に來寇し、之より戰場と目指す博多、今津への航行は、既に輕疾舟を曳船したものと思はるれば、全艦隊の壯觀は、史的繪卷物であつたであらう。

(4)乘　員

各船に對する乘員の配當を考究すれば

文永役に、蒙古軍一萬五千人、高麗軍八千人で合計二萬三千人、之は戰鬪員であつて、何れも本艦に乘るとすれば、之を三百隻に分てば、一艘七十七人となる。

水手梢工六千七百人、之を三百組に分てば二十三人となる、之を本船十五人、疾舟五人、汲水舟三人と分てば、本船は九十二人となり、之に武器、軍馬、糧食を搭載せねばならぬ。之だけの容積の大船を要する。

遠洋航海中は疾舟、汲水舟皆本艦に搭載すれば本艦乘員百人となる、が軍馬を載する船には人員を減して他船に按分すれば本艦には百二三十人も乘る船もあらう。

文永役、颱風一過後、博多灣、志賀島に漂着せる敵艦一隻を捕獲、俘虜百二十人とあるは、蓋し搭乘人員數を如實に立證するものである。

○弘安役

弘安役については船艦に對する區別の記錄はないが、東路軍は朝鮮にて艤裝したので文永同様、千料舟、輕疾舟、汲水舟各々同數を準備したものと思はる。

江南軍は揚子江口杭州寧波附近で艤裝し、總數三千五百隻で、之を千二百隻が千料舟の戰艦、殘りが疾舟、汲水舟半數宛と想像して差支あるまいと思ふ。

此の大艦隊を無事支那海を横斷して中間根據地の値賀、平戸に着いた彼の航海術、敵ながら賞讃に値する。假令史上には記さないが裏面には大苦難があつたことは想像に餘りある。

(5) 江南軍の船列

江南軍の大船隊が、最後の目標、平戸より博多に向はんとする船列を考ふれば、

當時、東路軍は壹岐にあり、之より直ちに博多灣に向ひたれば省略して、

江南本隊の本艦を千二百隻として、今平戸、博多灣間二十五里と見て、幾部隊に區分して出發せしならんも、假りに單縱列と見れば、一里に四十八隻、二十五里で千二百隻となり、平戸から肥筑の海を掩うて博多灣まで連續することゝなる。

實に世界航海史上、空前絶後の大壯圖である。

嗟吁、我が國土、滿帆襲來する、蒙古山嵐に、風前の燈火に似たる危急存亡、此の實況に接したる、鄕土の人も山も、想ひやるだに悲壯なり。

そして、其の風向や、いかになりつらん。

(6) 和船操櫓の速さ

日本獨特とも誇る、和船の操櫓術の速さを聞けば、

蒙古襲來繪詞に見る、鎧武者十人位を乘せ之を五挺櫓にて押す和船の速さは如何。

之が普通の海（普通と云ふは荒浪は無いが、さりとて亦鏡のやうな風ぎではない。所謂、普通の程度の海面）を櫓航するものとして、一時間凡一里（約二浬）位である。

今假りに、博多、平戸海上を最短距離四十六浬として、之を休息なしに、五挺櫓で操櫓するとしても十三時間は要するものある。

之は飲まず、食はずの働きである、食事も必要又夜間は晝間の如くならず、從つて前日の午後に博多を出て、翌朝に平戸に着く程度である。

(七) 多可島

多可島は博多灣頭にあり。

先づ文書に見れば

(イ)八幡大菩薩愚童訓

八幡大菩薩愚童訓の宮崎八幡宮の頓宮の邊りより景色展望を叙したるなかに

「(前略)後ニハ朝日ニ耀ク竈門山塵ニ交ル光ヲハ入江ノ鹽ニ浮ヘタリ、田地廣ク開ケテ農夫耕シ耘ル溝ヲ決テ雨ヲ成シ、荷鋤ヲ爲レ雲嘉禾九種新ニ瑞麥兩岐ニ秀タリ、稻葉ニ結ブ白露ホノカニ渡ル稻妻ノ、有歟無歟ノ假ノ宿、一切有爲法如露亦如電ト詠ヤル。

南ニハ白沙敷テ千萬歩、合浦ノ玉ニ比スベシ、青松茂シテ七八里名所之中ニ雙無、落葉掃タメウナヒコカ冬籠スル栖居モ有キ。

前ニハ蒼海遙ニ見渡セハ多可、野古、志賀三之嶋浮出タルワリナサハ蓬萊、方丈瀛州ノ三ノ神山ゾトアヤマタル (下略)

とある。

此の八幡大菩薩愚童訓は、元寇役後餘り年數のたゝない頃、石清水八幡宮の社僧が著述したものと云ふが、石清水社と宮崎社とは互に往來があつたので、著者の社僧が筑前に下り、元寇役後博多箱崎に生存してゐた實戰見聞者から情報を調集して書いたものと思はれ、箱崎附

近並に博多灣の景觀の記述が實地に適合し詳細に渉つて居る。

書物大體の構成を伺ふに、元寇役史料を骨子とし、遠き昔の神功皇后の三韓征伐の勝利も、元寇の勝利も、八幡大菩薩敵國降伏の神助功德によるものと說破し、功德と史料を巧に佛敎文學の文章體に編成したものである。

從つて此の文章の中の一句一章と雖も貴重なる史料が含まれて居ることを見のがしてはならない。

少しく譯讀を試むれば

竈門山(一名寶滿山ト云フ) 太宰府ノ東ニ巍峩トシテ聳ユ古今ノ靈峰タリ。

宮崎社の後には朝日に耀く竈門山(神功皇后三韓出征の必勝を神に御祈りの時、御妹の二人に神憑り、一人は寶滿大菩薩、一人は河上大明神と顯はれ給うたとあり、其の寶滿大菩薩が卽ち竈門山)が塵に交はる光をば入江の鹽に浮べたり、(佛敎で佛菩薩が衆生を導くため其の智光を和らげて塵世の人と同じ姿を現はし慈悲を垂れ給ふを和光同塵と云ふ)。

そして其の頃多々良の入江がズツト深く奥の方迄入込んで居つて其の入江の海水に寶滿大菩薩の和光が浮んで居る、即ち竈門山の高い姿（佛菩薩）を低い海水（衆生界）に寫して居るのが宛かも和光同塵の姿と同じと感ぜさする佛語的表現に、同時に、皇后三韓の勝軍を、後の蒙古全滅の伏線としてゐる。

田地廣く闢けて農夫耕し、耘り、溝を切り流して雨のやうな灌漑水も充分で、百姓が鋤を荷つて雲の如く、嘉禾（めでたい稻）には一本の莖から九穗が新に出て、瑞麥（めでたい麥）は一本の莖が兩岐に秀でゝをる。糟屋農園の豊穣を讃へてある。

又考ふれば人生は稻葉に結ぶ白露の如くホノカに光り渡る稻妻の瞬間に幻滅する有か無きかの假の宿で、華嚴經に一切有爲の法は露の如く亦電の如しを想ふては佛陀を念ずるのである（斯く難有い世も有爲轉變忽ち外寇あり彼我戰死者ある浮世を暗にほのめかす）。

南には白砂敷いて千萬歩あり、合浦の玉に比すべき景色（合浦は南支那の廣東省廉州府にあり、後漢の孟嘗字は伯周が合浦太守になつた、元來合浦のある郡は米がよく出來ないで、海中から珠が採れ住民の生計を助けて居つた、然るに以前の太守が皆貪慾で其の珠を沒收し人民を苦しめたので珠貝が次第に隣郡界に移り合浦で採れない樣になつた、此の時孟嘗が太守となつて來て仁政を布いたから不思議にも珠玉が再び合浦へ戻つて採れる樣になつたと云ふ傳說がある。人情と風景の明媚なる所をさしたのである）。

が此の合浦なる文語は後ちに珠の美から聯想して白砂佳景の海濱の別名となり、自然各地に利用せられてをる、仙厓和尙も詩に博多灣を合浦と呼んでゐる。青松繁茂して七八里の

名所、雙び無きもので落葉掃く幼童が冬籠りする栖居もあり。

前には蒼海渺々として遙かに見渡せば、多可、野古、志賀の三ツの島の浮び出たるワリナサ（無破）は實に何んとも云へない美觀で、蓬萊、方丈、瀛州の三ツの神山と見あやまるゝ景觀である。

右の文中で注目するのは

(1) 多々良の入江が深く入込んで居つた事。

(2) 多可、野古、志賀の三島が鼎立の形態を保つて博多頭灣に浮んで居る事、

が地理學的に貴重資料である。

此の文章を讀めば讀む程、博多灣展望の光景が如實に描寫してあり、恰も身其の境にある樣である。

然り、此の多可、野古、志賀の三島は夫婦子を抱く親子島の樣に、離れんとして離れられない灣頭の美觀實觀である。

是れ正しく當時既に多可島（後の玄界島）の稱號の實用せられた證據である。

（註）愚童訓は當時一般に愛讀せられたものであらう、寫本から寫本となり、色々別本が多い、之については改めて後章に註釋する。

(ロ) 河野家譜

對馬守通有、上野介通繼子也、弘安四年蒙古襲來、大軍充滿志賀、鷹島、能古等之海岸矣。

夷賊對治之事爲ニ先例一、故蒙ニ勅命一、爲ニ大將軍一、馳ニ向於筑前國一、（下略）

此の河野家譜は當時博多灣上に海を掩うて來襲せし敵艦に勇奮猛攻擊の體驗者、河野家の記錄である。

此の詐らざる家譜を讀む者、誰か書中の博多灣上の應島を、肥前應島と云ひ得んや。

(ハ)豫章記

通有（河野六郎任ニ對馬守一）弘安四年、蒙古襲來ス大軍志賀、應、能古等島々海上ニ充滿セリ、夷國退治之事ハ家ノ先例ナル間、大將トシテ筑前ニ進發ス、日本ノ諸勢博多、筥崎、上下三十里ノ海涯ニ築地ヲ高ク築キ、此方面々ハ馬ニテ馳上ル樣ニ土ヲ築キ上テ、面ニ亂杭逆茂木ヲ付タリ、海上ヨリ見ハ危峰ノ江ニ臨ムカ如シ、然レ共河野ノ陣ニハ海ノ面幕一重ニテ後ニ築地ヲツカセタリ、是敵ヲ輙ク引入一戰ノ勝負ヲ可ニ決ト也、背ニ逃遁アラバ味方ヤ逃トカクシテ一人モ引セシト也、從ニ是河野ノ後築地ト云付タリ。

などを見れば、何れも博多灣頭に鼎座する三ツの島をタカ島、シカ島、ノコ島と呼稱してゐる。

(ニ)更に愚童訓の弘安役博多灣第一戰後の蒙古軍の行動に關する記事に

「サレドモ蒙古此度ハ甚ダニ押靜マリテ軍ヲ急ガズ、何事ヲカ議スルアラン、兵船共ハ遙カ沖ナル應島ヘコソ漕キ寄セニケレ」

また一本には

「沖ナル應島ヘ引退ケレ……」

とある。

此の文章を吟味すれば、博多灣上の東路軍の戰況行動が手にとる樣である。

即ち六月上旬西戸崎（サイト）志賀島附近にて陸海戰に數日苦鬪した敵が、暫し休養せんと、帆を上ぐる迄もなき沖なる（一里計り）多可島（應島後の玄界島）まで櫓を漕ぎゆく有樣思ひやらるゝ。そして其の島影で戰傷者を勞はりなどしてゐる。

此の文章は、敵艦が尙我が視界內にある事を現はして、退却はしたが、まだ視えてゐるので、視えないやうに逃げ去つたのではない。

若し之が博多灣外に逃げ去つたならば

「行方知ラズ、逃ゲ去リニケリ」

と書くべきである。

或者は之を肥前應島と說く者あるが、影も形も見えない、未知の地に戰役直後の應急療養所を求むるなどは敵地戰況の許さざるものである。

抑も、箱崎、博多濱より多可（タカ）、志賀（シカ）、野古（ノコ）の三島を眺むれば、灣口の右にあるが志賀（五八一尺）、中央に高きが多可（七二〇尺）、左なるが野古（六四三尺）の順で、一番目につくのは中央の多可で、多可は志賀、野古の線より凡そ一里沖にあり、鳥瞰すれば三角點となる。

此の多可島（タカ）が天候により、手にとる樣にも視え、亦遠くに靄むもので、此の島の朝曦暮暉に

幾年月、接した者でなからねば、愚童訓文章の妙意は味へないであらう。

斯くて多可島附近に暫し休泊したる東路軍は、六月中旬何處ともなく外洋に撤退した、後之が壹岐に還つたものと知れた。

此處に研究家と云ふものゝ諸説が出る。

前述の鷹島は、肥前鷹島である、東路軍は博多灣より肥前鷹島に寄り、更に壹岐に行つたものだと、云ふのである。

之等は文章も、狀況も、亦時日も吟味せざるの甚だしいものである。

戰略上より考へても、博多灣を撤退し、何の要事もない肥前鷹島に行く譯はない。

當時まだ江南軍の來着は未定で、其の來着は壹岐會合の約束である。

從つて肥前鷹島などの地名島名は東路軍にも江南軍にも全く無關係で念頭にもないものである。

志賀、西戸崎の戰果は面白からず、病人は增加し、江南軍との會合約束期は來たので、直ちに壹岐に引き還したのである。

想ふに、壹岐には尙幾許の敵の兵站部が滯在して居つたものと推測せらる。

要するに

多可島は博多灣口を扼して、志賀（シカ）、野古（ノコ）と共に離れんとして離れられない親子島である。

（八）百戸張成之墓碑銘

○發　見

此處に珍らしくも元寇戰記を刻んだ石碑が發見せられた、所謂不磨の歴史文字で實に天與の史料である。

大正十四年（紀元二五八五）五月二十一日、關東省金州公會堂の校長岩間德也が金州城の北門外一丁許にある、天齊廟の西廡の小菜園に一基の碑石横はり僅かに尺餘を出してゐるのに、豫ねて興味を引いて居たので發掘した所、高サ四尺一寸三分、幅一尺八寸五分、厚六寸三分の石碑が出て、兩面に細文字の碑文あり、計らずも、元の至元十八年（弘安四年）蒙古軍に從ひ、日本に遠征した、百戸張成の墓碑銘であつた。

○碑　文

碑文の大意は、蒙古軍に從軍したる百戸張（諱成）が弘安四年潤七月朔（元では八月一日）の大颶風に會ひ、達運にも生還し、其の後仕官して累進、更に討伐軍に從ひ功あり、後、金州に分屯し至元三十一年六十九才にて金州に歿した、碑は張成死後五十五年、其の孫張重孫の建てたものである。

碑文は表面四十一字詰十九行、裏面十七行、楷書體の細字で入念に彫刻せられ、碑文の外周には唐草模樣等の裝飾が刻んである。

今其の表面の碑文を十四行だけ掲載すれば

皇元故敦武校尉管軍上百戸張君墓碑銘

東路蒙古侍衛親軍都指揮使司□□張克敬撰

東武司史王繼先書冊　芝陽石匠□頭吳安道　鐫刊

張君諱成蘄州人氏至元十二年內附十六年

詔選精銳軍士起赴京師克當侍衛君應

詔選時年已壯仕矣勤而有勇蘄州路新附軍總管司檄君權克百戸五月蘄州路將討□□復檄□□

侍衛軍百戸統軍八十六名暨妻孥至京師侍宿衛十八年　樞密院檄君仍管新附軍百戸率所

統增千戸岳公琇往征倭四月□合浦登海州以六月六日至倭之志賀島夜將半賊兵□□來襲君

與所部據艦戰至曉賊舟迺返八日賊遂陸復來君率纏弓弩先登岸迎敵奪占其□要賊弗能前日

哺賊軍復集又返敗之明日倭大會兵來戰君統所部入陣奮戰賊不能支殺傷過□賊敗去

行中書賜賞有差賜君幣帛二軍還至一岐島六月晦七月二日賊兵兩至皆戰敗之獲器仗無□二

十七日移軍至打可島賊舟復集君整艦與所部日以繼夜鏖戰至明賊舟始退八月朔海風作船壞

軍還至京二十一年君承命乾山伐木運至京師以爲修第之備二十二年十二月

勅授君敦武校尉管軍上百戸　（下略）

次ぎに元寇役に關係ある第八行より第十二行迄を譯讀すれば

（前略）千戸岳公琇ニ增ヒ往キテ倭ヲ征ス、四月合浦×□×海州ニ登ル、六月六日ヲ以テ倭ノ志賀島ニ至ル、夜將ニ半ナラントスルトキ賊兵□□來リ襲フ、君所部ト艦ニ據ツテ戰ヒ曉ニ至ル、賊舟迺チ退ク、八日賊陸ニ遂ヒテ復タ來ル、君弓弩ヲ率纏シ先ヅ岸ニ登リ敵ヲ迎ヘテ其ノ□要ヲ奪占ス、賊前ム能ハズ、日晡レ賊軍復タ集ル又返リテ之ヲ敗ル、明日倭大ニ兵ヲ會シテ來リ戰フ、君所部ヲ統ベ陣ニ入リテ奮戰ス、賊支フル能ハズ、殺傷過衆敗レ去ル。

行中書賞ヲ賜フ差アリ、君ニ幣帛二ヲ賜フ、軍還リテ一岐島ニ至ル、六月晦七月二日賊兵兩ヒ至ル、皆戰ヒテ之ヲ敗リ器仗ヲ獲ルコト算ナシ、二十七日軍ヲ移シテ打可島ニ至ル、賊舟復タ集ル、君艦ヲ整ヘ所部ト日ヲ以テ夜ニ繼ギ鏖戰明ニ至リ、賊舟始メテ退ク、八月朔、海風作リ舟壞レ、軍還リテ京ニ至ル（下略）

石碑面に缺所が出來、文字に欠字がある。

○讀み方の研究

欠字があるので碑文の讀み方も研究學者により、種々ある、先づ第八行目の

四月□ニ合浦ニ登ニ海州ニ

この□に「發」を入れたり、「至」を嵌めたりしてゐるが、之は「至」を入れるが適當と思ふ、「合浦」は朝鮮の南端、今の馬山浦と云ふ港である。合浦の朝鮮讀み「ハツポ」支那讀み「ホーブ」である。

「登海州の「州」を衍字（餘計の文字）と云ひ略して讀む研究學者もあるが、之は決して衍字でもなく略すべきでもない海州でなかからねばならぬ。「海州」とは海岸又は海濱或は島にも云へよう、「登」は上陸すること、で「至合浦登海州」は合浦港に至り其の附近の海岸海濱等に上陸した、と云ふことになり、此處に暫く滯在して六月六日倭（日本）志賀島に至るとなる。若し之を「發合浦登海」と讀んでは實況が寫らない、斯く讀初めの第一歩に誤差を生じては自然、行文の眞意を把握するに至らず、諸說紛々たるも無理からぬことである。物事は出發點に注意するのが緊要である。

次いで倭の志賀島に至るとあり、此處に初めて倭（日本）に入り敵地たる覺悟を明示してゐる。而して地名も明瞭に日本文字の「志賀島」と書いてゐることに注意すべきである。

此處で敵襲に會ひ奮戰し更に陸海戰に互に勝敗あつた情況を記し船に泊り（之が愚童訓では沖なる鷹島に漕き退く）戰功を賞せらるゝ事などあつて一岐島に還つた、之が六月中旬で江南軍との會合のためであつたが江南軍は未だ來てない。日本兵は六月晦七月二日壹岐に逆襲を敢行し奮戰した。

七月二十七日東路軍は大行動を開始した、即ち江南軍との連絡なり太宰府總攻擊のため、軍を移して「打可島」に至る、此の打可島は博多灣口の多可島（後の玄界島）で明瞭に日本文字の打可島を使用してゐる。打可島に至れば附近海防の日本兵は復た襲擊し來り、日を夜に繼ぐ大激戰が演ぜられてゐる、そして三日後の潤七月朔（八月朔）大颶風作り船艦覆沒、幸に生還して京に至る」とある。

さて

Ta Ke　打可（カトコノ間）　Ke　ロヲ開イテ「タカヲ」ト發音スカトコノ間、コニモ近シカニモ近シ

Tue Ke　多可（タカ）　タカ

○碑文の價値

此の碑文の發見により、日本軍並に東路軍の行動が明瞭となり且つ東路軍が博多灣口多可島附近にて覆沒したこと愈々立證せられ、從來の半信半疑を一掃して確然となつた譯である、此處に此の百戸張石碑の史的價値が重要視せらるゝものである。

○異說

然るに一部研究家は此の打可島を肥前鷹島と呼び做し、碑文の重要史料を攪亂する者があつては、墓銘の主は草葉の蔭から苦笑禁じ得ないものであらう。

抑も文章を讀むには虛心坦懷であらねばならぬ、從來諸種の和書、元史等を讀んだ人々が、東路軍は再度博多灣に來て居る樣であるが其の覆沒後の消息が不明である、さりとて平戸方面に行つたとしても不充分であやしい、又江南軍は平戸及肥前鷹島海上で覆沒し其の掃蕩戰は和書にも窺はるゝ、更に江南軍の先頭は博多灣近くに迫つた樣にもあるが、東路軍は依然疑問を以て視て居つたとき、偶然東路軍に屬した百戸張の碑文が出現し其の中に「打可島」とあつたので、何の思慮を廻らす際もなく、直ぐ樣肥前「鷹島」と見做した譯で、一種の錯覺の働きで

あらう。

打可島（Ta Kô Tao）と鷹島（Ying Tao）とを見直さねばならぬ。

月天心に澄める夜、靜かに考へ、

碑文の打可島を肥前鷹島としては、東路軍の行動、江南軍の連繫に合點の行かないものがあるを感ぜらるゝのであらう。

（九）七月二十七八日戰（弘安四年）（附地圖參照）

往時の木造帆船艦時代に博多灣攻擊を企圖するものありと假定せば如何。

多可（タカ）島（玄界島）內側に防禦軍が居れば、攻擊軍の多可島東西兩水道進入は困難である。

從つて多可島水道の制海權獲得は戰略上最も重大なる意義あるものとなる。

是れ多可島が水軍戰士の腦裡から寸時も離れられない理由である。

默として語らざる多可島、それは攻防兩軍の天王山であらう。

弘安役、東路軍の參謀初め各將校、亦此點に留意したるは云はずもがな。

若し夫れ、玄海洋を航行して、博多灣に入港する船上の人々、船客たると、船員たると、戰士たると、誰とて神仙秀麗の多可島を眺めたるとき、島の名を問はないものはない。

況んや敵ながら文武兼備の百戶張が博多灣內の志賀（カ）、多可（タカ）、野古（ノコ）の島の間に碇泊十日近、最も印象深き其の志賀、多可の島影は、彼が終生忘れんとして忘れられないものであらう。

日本名詞で「志賀島」と立派に書いた彼が、其の眼前に朝夕接した「多可島」の名稱を亦島民から聞かない筈はない、必ず聞いて忘れなかつた文字が「打可島」である、耳と目から入つたものである。

彼が文才は幾百年後、其の光彩を史上に放つたものである。

然り此の木造帆船隊の水戰を以てする、太宰府總攻擊の大兵上陸地は、文永役の瀨踏みにて松浦潟は斷崖多く不適なるを、爾後の不便を考へ、是非共筑前平野に求め第一戰區を博多灣に決定し、其の占據のため、第一關門たる多可島水道通過は蒙古軍にとり寸時を爭ふ戰機である。

想ふに當初作戰には東路、江南合體の計畫なりしも實際遠洋航海の體驗上大多數艦隊の運用は返つて戰術上の不利を誘致するの危惧を慮り、更に熟考畫策の結果、一般方略の下、之を數艦隊に區分し、攻擊戰區を定め之に向つて進擊を開始するに至つたものであらう。

平戸附近に集合せる江南軍さへ其の兵站物資供給に不便を感じてゐるに、之に壹岐の東路軍が合併しては更に不便の追加するは明瞭、かゝる愚策は取らざるものである。

又我軍にとりては、江南大軍の平戸着は承知なれど、東路軍が壹岐に占據して居ては、博多の警備を割いて肥前方面に分遣するを得ず。而も敵の作戰は依然博多灣の着眼と見做すべく、爲めに我軍は兵力の分散を避け、斷然、博多灣沿岸に攻勢防禦の待機をするに決した。

二兎を逐ふは一兎を獲ず、博多灣頭此處に我が肉彈は、敵の心膽を射貫かんとす。

果然此の想定は的中した、

敵は行動開始した。

平戸の江南軍、壹岐の東路軍の連絡作戰部署は編成完了した。

總攻擊は發令せられたり。

東路軍をして直ちに博多灣に先發せしむ、七月二十七日壹岐に待機せし東路軍、勇躍浪を蹴つて進航し其の百戸張の船隊、多可島水道に入るや、之れ亦防備に待機した日本軍の戰士は浪を押して敵船に蝟集した。

碑文にある

二十七日移レ軍至二打可島一賊舟復集、君整レ艦與二所部一日以繼夜鏖戰至レ明、賊舟始退、

此の文章を味へば、復集まるなる語に最も力がある、即ち第一次戰に來襲した日本船が、復又反覆來襲し來る、實に「ウルサイ敵デアル」との口吻が筆外に躍如として如何に日本軍の攻擊が面倒頻繁であつたかゞ窺はるゝ、而して其の戰士は今津、志賀方面の防備隊を第一とし沿岸の勇士の奮戰である。

異國襲來祈禱注錄にも「異賊之船、博多金津ニ入之注進」の句あり。

金津（Chin Chin）＝今津（Chin Chin）

である。

東路軍としては、如何なる犧牲を拂つても多可島水道の制海權を獲得して置かねば、明日に迫つた全軍の大行動に影響する。日に夜を繼ぐ攻防戰も之が爲めである。

之れ蒙古軍の一般戰略上から推考しても、七月二十七八日戰は肥前に非ずして、筑前であつた證である。

斯くて敵は苦戰惡鬪の末、其の衆多の力を恃みて、群がる日本軍を排除し、先づ多可島より

三四

唐泊、西浦附近に假泊し、多可島及びムクリ岳に展望哨を上げ、前月失敗の西戸崎區の情況を窺ひ、西を見渡しては江南本隊の來着を今か今かと待つたものと思はる。

嗚呼、

戰雲は孕みぬ、刻、濃く、刻、重く。

博多灣沿岸、Z信號は上りぬ、陸と海、龍虎、睥睨して、いま嘯かんとす、宜なり、雲湧き、風起らざらめや。

(十) 颱風一過

天日、蝕りぬ。

こは、そも何事ぞ、悽氣漲りて、海も空も全べて陰鬱、息苦しき寡圍氣、眩溟せる視界、八幡大菩薩愚童訓は之を叙して

青龍海ヨリ頭ヲ持出シテ硫黄ノ氣虚空ニ滿リ、異類異形ノ者共、眼ニ遮リケルニ恐ヲナシテ逃ゲ去リヌ、

然り、水上の妖氣は凝つて、浮ぶ變怪の形となれば、或は青龍と見え、或は巨頭と迷ふ、錯覺の感觸に、我も人も怪異に恐怖するのである。(大異變瞬前の靜寂)。

況んや敵地にありて此の異變に接する蒙古軍、早や戰はずして身に戰慄を覺え、士氣沮喪甚だしきあり。

抑も、何の、前徵ぞ、

嗚呼、來れり、

颱風、颱風、颱風、

颱風は夜の寂寞を破りて、地上物、海上物、悉く覆し盡した、果ては立體破壞だ。

玄海の浪は空を打ち、艨艟は海底に墜ち、慘凄を絶したる未曾有の氣象變化、而して全べて

事實である。

最後の必勝を期したる元の大軍、今や眼界に亡し。

此の海に生とし生けるは波間に跳る大怪魚の群の、水雷の如く物凄き出沒である。

八幡大菩薩愚童訓は之を吊うて

沖ニ漂フ海ノ面ハ算ヲ散スニ異ラズ、死人ヲ多ク重テ山ヲ築クニ相似タリ、身沒魂孤望郷ノ鬼トナル事、雲南ノ瀘水モ爭カデ是ニハ及ブベキ

身を敵地に沒し、魂が孤獨となり、寂しく望郷の鬼となつて亡魂が迷うて居る憐れさは、昔、支那の軍師諸葛孔明が北方の魏の曹操を討つ前に後顧の患なき樣に、蜀の南方の雲南の南蠻王孟獲を討ち、七度び擒にして七度び赦し、孔明の智德に感じて降伏させたが、其時瀘水河を渡りて深く不毛の地に軍を進めたので、澤山の兵士が南方瘴癘の氣に打たれ、戰歿病歿した、それで軍を還す時に瀘水の邊りで彼我兩軍の亡靈の供養祭をした事がある。それを今眼前の蒙古軍の覆滅と比すれば、定めて亡魂も浮ばれまいと吊つてある。

更に肥前海上に眼を轉ずれば

「鷹島ニ打上タル異賊數千也、船無シニ疲レ居タルカ破船共ヲツクロヒテ七八艘ニ乘テ逃ケル……平ニ降ヲ乞フ、サノミ生テハ無益ト中河鰭ニテ首ヲ切ル……」

と鷹島掃蕩戰の情況俘虜處分法など手にとる樣である。

元來日本傳には、此の俘虜數を二三萬と記してある、而して研究學者は此の萬を以て數ふる虜兵を博多那珂川の邊りで斬つたと確言してゐる。萬人に近い人員を行路不便なる肥前鷹島より筑前博多に、抑も如何にして輸送したるか、陸路か船舶か、其の指揮官たる者の苦心や同情に値する。此は是れ想ふに其の主將數人は博多の軍司令部に護送せしならんも、他は全部肥前鷹島にある中川附近にて處分せしものと判斷すべきである。

強いて萬人近くの虜兵を博多那珂川にて處分せりと主張する學徒は、同時に夫等を搭乘せし船艦は卽ち博多灣口にて覆沒したるなりと、裏書するに同じきを悟らねばならないであらう。

颱風來、颱風去。

嗟吁、何たる神秘ぞ。

颱風一過後の筑肥の海、そは神の審判の下された後のことであつて。

筑前多可島、玄海灘風光霽月の神秘境と、肥前鷹島、千崎沖の阿鼻叫喚の修羅場とは。

天が演じた神出妙化の掃海術と、人が演じた百鬼亂闘の掃蕩戰で。

影も見せない東路軍と、殘骸を浮べた江南軍の、極樂と地獄を想はする、夢の樣な繪卷物であらう。

そして覆沒船が影を見せうと、見せまいと、それは天の裁(さばき)の後の事であつて、敢て之を疑ふものは、眼をこすりて、七年前、文永十一年第一次蒙古襲來に、堂々たる九百隻の大艦隊が博多灣内を蹂躪し、最後の上陸大勝利を夢みて袖の湊に碇泊したる夜に。

突然起る、颶風一陣、

竈門山颪の猛烈、夜明くれば、博多灣上、掃き清めたる如き靜寂に、纔か一艘志賀島に漂着し、殘る八百九十九隻は、何地何所へか吹き飛ばされて、片影だに無かつた奇蹟の事實を追想

するとき、

此の弘安役、博多灣口、多可島戰區の颱風一掃を疑ふべくもなきものである。

強ひて知らんと欲するならば、玄海の天うつ浪に訊ぬる外はあるまい。

それも風いだ乙女の肌の樣な海面は、おもはゆげに何も語るまい。

狂瀾怒濤の、あの飛沫こそ、日本男子の度胸試しの聲語であらう。

(十一) 百戸張と張百戸

肥前鷹島は弘安役に離すべからざる史蹟地である。

而して颱風前よりは一過後の掃蕩戰に於て特に認められたものである。

江南軍が本國出發時に於ては鷹島は其の作戰基地の何れにも認められなかつたことは既述の通りである、本隊が平戸を中間根據地とするに及んで其の附近に各小部隊が適宜に上陸屯營したことは當然で、同時に鷹島も其の被難は免かれなかつたものであらう。

一方太宰府に於ては太宰府を中心に、博多灣沿岸を防禦第一線として之に全力を集力したので、遠隔の地は防備が手薄となつたことゝ思はる。

尙二三、鷹島と百戸張と張百戸に就き說明を餘儀なくさせられる。

× × ×

百戸張碑銘にある七月二十七日戰は東路軍が博多灣口で苦鬪した事は既述の通りであるが、之が肥前鷹島で演ぜられたではないかと質問する者もある、が、それは狀況判斷が尙不充分である。

碑文を熟讀すれば二十七八日戰には强固に抗戰し日を夜に繼いで逆襲した日本軍が居つたのに、それより僅か三日後の大颶風に覆沒したる蒙古軍に對する掃蕩戰は、更に數日後を經過したる七月五日頃（元史は七日）から博多より急追した勇士で演ぜられた、緩漫さの理由は如何。

之れ卽ち二十七日に東路軍が肥前鷹島に來らず、從つて鷹島及附近には東路軍に抗戰した勢力の日本軍も駐在せず、同樣に江南本隊も七月二十七日までは鷹島に來らず、博多へ向け最後出發迄は平戸を中心基地として動かず、東路軍亦壹岐を基地として居つたので、結局兩軍は肥前鷹島で會合せなかつたことを證明せらるゝものである。

× × ×

此處で考ふべきは颶風直後平戸沖で、顚覆船を親切に指揮整理したる敵將に「張百戸」なる者が居る。肥前海上にての颶風被害も場所により程度を異にし、平戸附近は比較的輕く、鷹島沖は甚大であつた樣である。

元史日本傳

八月一日風破レ舟、五日文虎等諸將各自擇二堅好船一乘レ之、棄二士卒十餘萬于山下一、衆議推二張百戸者一爲二主帥一號之曰二張總管一聽二其約束一方伐レ木作レ舟欲レ還七日、日本人來戰盡死、餘二三萬爲レ其虜去、九日至二八角島一盡殺二蒙古高麗漢人一謂二新附軍一爲二唐人一不レ殺而奴レ之、闔輩是也、蓋所省官議レ軍不二相下一故皆棄レ軍歸久之莫青與、吳萬五者亦逃還、十萬之衆得レ還者三人耳。

（今說明のため此の張百戸を假りに「江南百戸」と呼ぶ、以下之に準す。）

此の二人が同一人かあるかゞ問題である。

之は決して同一人でなく必ず別人であると判定せらるゝ卽ち「江南百戸」は平戸海上で活動後戰歿し、「東路百戸」は平戸方面に來らず、博多方面にて行動後幸運にも歸還した者である。

若し「東路百戸」が平戸方面に來てゐたと假定すれば、前述の元史の記錄は難船に就いて相當詳記してあり、從つて打可島が肥前鷹島であるならば、其の島名の本文字を使用すべき筈であるに、何等「タカ島」に就いては一筆も記入してない。之れ「江南百戸」と「東路百戸」は別人であつて、前者は平戸で戰死し、後者は平戸に來らず博多方面から生還した者であると、同時に「打可島」が「肥前鷹島」でない第一證である。

若し「江南百戸」が戰死せず生還してゐたとすれば、元史の記事の彼が活躍は實に戰場に於ける軍司令官の感狀と同樣の勳功である、故に范文は罰せられ、張禧は免れたなどの論功行賞に當り必ずや彼も亦行賞せられたるに相違なく其の記事が戰場の記事同樣に元史に載るべきであるに、夫等に關し何等記錄なきは矢張り肥前海上で戰死したものである。

若し亦「江南百戸」「東路百戸」とが同一人とせば、「東路百戸」が志賀島戰後艦上にての行賞を碑文に記載してゐるに微し生還後の行賞をも必ず記載すべきに其事なきは「東路百戸」は元史にある如き、肥前海上にての難船に對する善處をなした者に非ず、從つて「東路百戸」は肥前海上に出動せざりし第二證となるものである。

× × ×

「東路百戸」は最後に博多灣口に來て、灣口の「多可島」に「打可島」の文字を使用し、石碑に不朽を遺したが、之れと同樣に肥前海上遭難の歸還者が「肥前タカ島」の名を覺えて居たらば、其の戰況報告により、元史の記者は之に似た語音の文字を適用したであらう、「竹島」など書くべきでない。

又肥前タカ島で、若し島民から「鷹島」なる文字を見せて貰つてゐたら、之を「キン島」と記憶し、之に似たる語音の文字を充當したであらう。

然るに、夫等の形跡なきは、耳からも、目からも入らないもので、何れにせよ、元史には「タカ島」の片影だに認められないのである。

然り而して、平戸及鷹島海上にて江南本隊の遭難は事實である、確實である。鷹島に敵兵の多數が匐ひ上つたも事實であるが、辛ふじて難船を操つ歸還した者は島の名を聞く沙汰でなく、亦上陸した者、或は前から屯營した者は掃蕩戰で全滅したので、島の名を傳ふる者無かつたのである。

而も「東路百戸」は肥前に來たらず、結局肥前「鷹島（Ying Tao）」の名は元史の史料に傳播せず、史上無名であつたのは、肥前鷹島史蹟上遺憾のものである。

（註）東國通鑑は東路軍の記事に委はしく、元史は江南軍の記事に委し、近年の著書に「新元史」あり、二百五十七卷の大著なれど民國八年（大正八年）の版にて、日本の近頃の元寇史を參考にしたものと思はる、其の意して讀むべきである。

（十二）結尾

八幡大菩薩愚童訓の「多可島」は、博多灣頭にある。

博多灣頭の「多可島」は、百戸張碑銘の「打可島」である。

「多可島」と「打可島」一體同身である。

今「玄界島」と呼んでゐる。

五萬分一地形圖上では、一顆の梅ノ實大に過ぎない島影である。

そして博多灣口の定石として、動かせないものである。

多可は南を受けて春早く、冬晩く、住めば都の樂土である。

誰か云ふ、無人境などゝ、そは其の昔、此の島に移り來し住民の、漸く自治自營に入らんとするや、海賊之を冒かすこと度々、自衛防禦力小さき島民は止むなく一時他に避難するを繰り返すことありしと聞くものを。

島は船を繫くべく、水を汲むべし、

中央の山には小鷹神社（祭神、伊弉諾尊、伊弉冉尊、美島磨神）あり、

捨つるに捨てられない、寶島である、保健の地、氣候順和、玄海洋上の紅一點であらう。

サモアラバアレ

大陸への重要航路は、情緒濃かな、入船出船の博多港より、荒るれば逆巻く浪に艨艟を吞み、靜まれば涼しき月を宿す玄海灘を鮮滿へと繫いて居る。

灣と灘との界に、朝日に輝き、夕陽に映え、金波銀波の島影の偉容、繪に見る蓬萊山を想はしむるは、是ぞ我等の多可（打可）島である。

そして此の島山が博多灣の出口であり、同時に玄海灘の入口である。

多可は屹然と聳えてゐる。

古今永久、博多灣の鎭守である。

× × ×

以て「多可島考」となす。

昭和十五年十二月、稿

（附　記）

○八幡大菩薩愚童訓（記）に就いて

一般に八幡愚童訓は八幡愚童記と呼ばれてゐるが、之は原本は「八幡大菩薩愚童訓」であつたのが、久しい間に略稱せられたものと思はる。

石清水の社僧の著述と云ふことだが、其の署名奥書ある第一原本は今ない。昔く愛讀せられ、寫本が流布したので今どの本を見ても同一文辭でない。

參考のため私の接したものをあぐる、説明のため任意下段に所在地により假稱を附する。

○八幡大菩薩愚童訓……寫　本……（三輪本）

貴重史料たる筑前國風土記逸文に遺る、夜須郡大三輪神社（今は朝倉郡三輪村縣社大己貴神社）の神職松本家は舊藩時代の儒家で、藏書も夥山あつた、其の中に寫本の「八幡大菩薩愚童訓」がある。片假名文字で「三千世界之中央一四天下之南邊劫初之人者化生シテ壽命之長無量也」に初まり「八幡三所之御利生也」に終つてゐるが、奥書には「大奥書者最祕密之書也」として年月署名など無い。此の奥書の筆法は昔の寫本には多く見るもので一種の秘密扱ひにせられたものである。私は元寇の書物と云へば、若い頃此の本を讀するより外にはなかつた。

○八幡愚童訓（記）……刊行本……（伏敵篇）

元寇史の大參考書である伏敵篇を繙けば、八幡愚童訓（記）の引用例が幾つもある、正應本と云ひ、文明本と云ひ、群書類從本と云つて其の努力は感謝するが、何れも引用であるから斷片であつて全文も奥書も知られないで物足らない感じがする。が、之で多くの種類のあること豫知せらるる。

○八幡ノ蒙古記……刊行本……（正應本）

伏敵篇に引用してある正應本の原本を見たいが其の在所が分らない。

橘守部全集の第六の蒙古諸軍記辨疑を閲すれば、「八幡の蒙古記、此書に二種あり、印本の方は愚童訓として眞片假字に記して軍書の風なり、そは後に手を加へたるものと見ゆ、寫本の方は平假名にして自記のさまなり、これ其原なるべし、おのれが得たる古寫本には、正應二年己丑八月、筥崎宮社宮圖書允定秀誌とて花押あり、さればこれも彼の時に在て、まのあたり見る處の狀と記しつる實錄也」とあつて正應本の重要史料たることが證してあるが、之も全文が轉載してないので、遺憾である。

○八幡大菩薩愚童訓……寫　本……（筥崎本）

福岡市箱崎町筑紫友枝氏の所藏である、二册の入つた箱書には「天明八戊申年南呂望日、八幡愚童訓全部二册加藤一純謹納」とあるが、所藏者は「明治元年四月まで、八幡筥崎宮別當坊座主彌勒寺に傳へたもので、慶寺後、還俗筑紫氏と稱し保存したものとなつてゐる。之も片假名文字で「三千世界中央一曲天下南邊劫初之人者化生シテ壽禽シ長ハ無量也」より初まつてゐるが、二卷目の終りが破失して奥書の見られないのは最も遺憾である。

何れにせよ奉納者は、筑前國續風土記附錄の著者であつて、且つ筥崎八幡宮のお膝下に傳はるものとして貴重史料と信ずる。

○八幡大菩薩愚童記……寫　本……（文明本、伊豫本）

文明本、文明本と引用せらるるので、東京帝國大學史料編纂所で見る、表題に「八幡愚童記」とある、開卷第一枚の内題に「八幡大菩薩愚童記」とあるので、之は慥かに八幡大菩薩愚童訓の系で、題目略稱の過渡期の適例を示したものと感じた。「三千世界ノ中央一四天下ノ……」に初まり、「二册が……御利生也」に終つて其の先きに奥書がある。

奉　寄　進

文明拾五年癸卯林鐘中是出

筆者　永　澄

拾と年の間に五を落したので左側に小○をつけ右側に五が追記せられてある。文明十五年は紀元二一四三癸卯である。

更に史料編纂所の記入がある。

右八幡愚童記

伊豫國西宇和郡八幡濱浦八幡宮氏子總代淺井記博藏本明治二十一年四月編修長重野安繹採訪明年四月影寫了

四國の伊豫にあつた書物を東京帝大の採訪者が見出し之を模寫して保存してある。之が文明本と稱するもので、片假名文字で入念に書いてあり、原本の保存の立派さも窺はるる。

○八幡愚童記……寫　本……（元祿本、山城本）

東京帝國大學史料編纂所に實寫してある、之は書出しが「抑八幡大菩薩者仲哀天皇第四御子、御母儀ハ神功皇后ニ御座ス……」で前述の各本と異なつてゐるが、内容は似たりである。此の本には奥書がある。

元祿十丁丑年三月廿五日裏打仕直シ也

當所榮座住人

經師　茂兵衛記

御社綴御次目時也

更に史料編纂所の記入がある。

右八幡愚童記山城國綴喜郡八幡町菊大路纓清氏所藏明治三十七年十二月採訪同三十九年六月影寫了

之も採訪者の見出したものを實寫してあるが、文字も保存も立派である。

○八幡愚童訓……木版本……享祿本、群書類從卷第十三、檢校保己一集……（圖書寮）

宮内省圖書寮藏書である。「三千世界ノ……中央一四天下ノ」に初まり、奥書に本云

享祿五辰九月三日書之　但　願範　筆者也　快元　在判

又云

貞享乙丑仲夏以青蓮院尊證親王家本校之

右八幡愚童訓以屋代弘賢本校合

とある。此の群書類從全集は刊行せられたので廣くゆき渡り參考閲讀に便である。

○八幡愚童記……寫本……（圖書寮）

宮内省圖書寮藏本である。「三千世界ノ中央一四天下」に初まり、奥書なし、柳原家献上本である。

○八幡愚童記……寫本……續群書類從卷第三十……（圖書寮）

○八幡愚童記……寫本……（圖書寮）

右二本とも宮内省圖書寮藏本である。此の二本とも序文が「夫人界ニ來ル事ハ六趣ノ中勝レ神國ニ生ルル事ハ四州ノ間ニコエタリ」に初まつてゐる、内容も目錄があつて、垂跡御事、名號御事、遷座御事、御躰御事、本地御事、王位御事、（以下略）等に分かれてゐる、而して元寇戰記に關する事はなく、全く御神德を敬仰したるものである。

○八幡愚童訓……木版本繪入……（圖書寮）

宮内省圖書寮藏本である。例外なるもので内容は上中下の三部に分れ目錄も（上）應輪降伏、御神樂の卷、龍宮入、異國渡、御産の卷で三十枚之に八枚の挿繪、（中）文字之初、足立寺、水瓶破、指の浦合戰、景資大將軍を討、極樂寺遷、夜半之猛火、弘安之合戰、で三十八枚之に十一面の挿繪、（下）放生會之初、はと屋、舍弟三議奏、御世次、法軍、で三十一枚に八面の挿繪入り、奥書に

寛文四年甲辰孟春吉日　　洛陽　松長伊右衛門開板

とある、想ふに或は愚童訓としての本意義は、此の書こそ民衆に徹底するものあつたのではあるまいかと見らるる。蓋し、愚童訓（記）中の珍書である。

○八幡愚童訓……寫本……享祿本……（神宮文庫）

伊勢の神宮文庫の藏書である、宮内省圖書寮のは木版本であつて、之は寫本である、「三千世界中央一四天下」に初まり、奥書に「享祿五辰九月三日書之但顧佗筆者也　快元　在判」とあり、天明四年村井古巖奉納である。

○八幡愚童記……寫本……（神宮文庫）

神宮文庫藏書である、「三千世界の中央一四天下」に初まり、奥書なし、

○八幡宮愚童記……寫本……（石清水八幡宮）

愚童訓の著述元と云はるる、京都府石清水八幡宮社務所に伺ふ。「八幡宮愚童記、釋迦譜」あり、「三千世界中央一四天下ノ」に初まり奥書なし。

○八幡愚童訓……寫本……（石清水八幡宮）

石清水八幡宮の藏書である。「夫人界ニ來ル事ハ六趣ノ中ニ勝レ神國ニ生ルル事四州ノ間ニ越タリ」に初まり、目錄は、垂跡御事、名號御事、遷座御事（下略）で奥書なく、元寇戰記に關係ない。

以上のものを類別を試むれば

類別	書名	説明
第一類	八幡大菩薩愚童訓……筥崎本 八幡大菩薩愚童訓……三輪本 八幡大菩薩愚童記……文明本（伊豫本）……史料編纂所	八幡大菩薩愚童訓が原名と思はる。

第二類	八幡愚童訓……享祿本、群書類從第十三……圖書寮、神宮文庫	序文「三千世界中央一四天下」
	八幡愚童記……圖書寮、神宮文庫	
	八幡宮愚童記……石清水八幡宮	
	八幡蒙古記……正應本……橘守部蒙古諸軍記辨疑	
第三類	八幡愚童記……元祿本（山城本）……（史料編纂所）	序「抑八幡大菩薩者」
第四類	八幡愚童記……（圖書寮）	内容垂跡御事、名號御事等
	八幡愚童訓……續群書類從第三十……圖書寮、石清水八幡宮	
第五類	八幡愚童訓……輸入本……圖書寮	珍書ナリ
計　拾四種、五部類となる。		

かく寫本の多くが流布したのは同書の信用あつた證で、若し内容の記事に地理的等にも間違ひあつたら非難が起つたものであらうに斯る事なく廣く行き渉つて居るに見ても其の記事の信頼が思ひやらるる。

◇　◇　◇

跋

總べての書を信頼するは、書なきに如かずことだと聞かされた。

元寇研究書の如き、累年學者研究者が練磨を重ねて編集の、日支鮮浩瀚なる又短篇なる幾多のものあるを、之に倚りて、多年史境を辿る程に、思はぬ邪魔物あるを遮けゆけば、やがて謎の森に迷徊し、知らず日の暮るゝに至るは、宛かも赤、青、黄等の鮮色を混合すれば暗黒色の闇になるに似たものでせう。

歴史は事實ならん、されど之を記述すれば必しも正鴻を保たれないで確實を欠ぐ、欠かれたるものによりて亦敷衍す更に秘密あり、威壓あり、誇示あり、模糊あり、雑音あらん。

宜なり、史を修むる者は、如何に多くの參考史料の蒐集を要すると同時に、夫等より如何に多くのものを削除せねばならないかを忘れてはならない事が緊要で、斯くて史蹟に一縷の經路を拓き得るものであることゝ戒められてゐる。

本篇起稿に當り、師友の良指導あり、又先輩の善書あれど、要は史蹟に尋ね、地質に探り、心を虚ふして、自粛自戒、或は風雨に晒され、或は松籟に聽き、漸く此處に綜合史圖

を描出すれば、水天霽れて、郷土史蹟の明朗を感受し、只管、神明の照覽を祈るのである。

◇　◇　◇

本篇起稿に當り玉泉大梁氏（福岡高等學校教授）、辛島小四郎氏（儒者）、川上　義氏（東亞同文書院卒業、支那在住二十年）、花見朔己氏（史料編纂所）、尾形鶴吉氏（宮内省圖書寮）、大西源一氏（神宮司廳）、有田邦雄氏（長崎報時觀測所長）、伊藤文雄氏（京城府土木課長）の諸氏に御指導並に御手數を煩はしたるを謝す。又元寇史古今の幾多著者に敬意を表するものである。

昭和十六年一月

福岡縣囑託　川上市太郎

昭和十六年三月二十五日印刷
昭和十六年三月三十一日發行

製本地
仕上番號　年　月　日
元寇史（たいあ）
備考
事
課
物係）
郎
所
八〇番
九三番

を描出すれば、水天霽れて、鄉土史蹟の明朗を感受し、只管、神明の照覽を祈るのである。

◇　◇　◇

本篇起稿に當り玉泉大梁氏（福岡高等學校教授）、辛島小四郎氏（儒者）、川上　義氏（東亞同文書院卒業、支那在住二十年）、花見朔己氏（史料編纂所）、尾形鶴吉氏（宮内省圖書寮）、大西源一氏（神宮司廳）、有田邦雄氏（長崎報時觀測所長）、伊藤文雄氏（京城府土木課長）の諸氏に御指導並に御手數を煩はしたるを謝す。又元寇史古今の幾多著者に敬意を表するものである。

昭和十六年一月

福岡縣囑託　川上市太郎

昭和十六年三月二十五日印刷
昭和十六年三月三十一日發行

福岡縣社寺兵事課
（史蹟名勝天然紀念物係）

印刷者　福岡市渡邊通四丁目　間藤次郎

印刷所　福岡市渡邊通四丁目　秀巧社印刷所
電話西②（二一八〇八番）（八九三番）

14.5
545

終